國文抄本

文訓 樂訓 全

K220.81
47

K220.81
47

文學博士上田萬年編纂

國文抄本

文訓　樂訓

東京大日本圖書株式會社

はしがき

この書は、文訓と樂訓とを抄したるものなり。二書共に貝原益軒の著せる教訓書にして、文訓は文武の文につき、樂訓は人生の樂について說けり。たやすく世の人に之を讀ましめんがために、その文章は平易にして懇切なるを旨とし、この抄本は、新に小題目をまうけて之を次第せり。

著者貝原氏、名は篤信、字は子誠、通稱は久兵衞、益軒又は損軒と號す。福岡藩の人、寛永七年（皇紀二二九〇年）を以て生る。少くして父に醫を學び、又好んで佛書漢籍を讀みしが、遂に儒學を以て世に立たんことを志し、二十八歲にして京都に出で、松永尺五・山崎闇齋・木下順庵等に學ぶこと三年、學大いに進み、京都に講筵を開き、又諸國を漫遊せり。後

治 1.24 43

に鄉藩に仕へて、優遇を受け、七十一歳より致仕して、京都に隱居し、正德四年鄉里に歿す。年八十五。益軒人と爲り、謙遜にして傲らず、博覽にして强記なり。其の學風平易實用を旨とし、書を著すに常に假名多き文章を用ひたり。其の著書甚だ多く、その敎訓書及び紀行文の類、廣く世に行はれたり。

國文抄本

文訓　目次

一　わかき時は……一
二　智ある人は……二
三　學問……三
四　論孟……四
五　和歌……五
六　詩……六
七　文章……七
八　故事……八
九　詩歌を作らば……八
一〇　あしき詩歌を作らんよりは……九
一一　書狀のことば……一〇

一二　文字知りたりとて……一一
一三　人の文字を見ば……一二
一四　人にあはゞ……一三
一五　われに學ありて……一四
一六　一師五友……一四
一七　わが身をかへりみて……一五
一八　生れつきすなほなれども……一六
一九　一句を見ても……一六
二〇　人の是非……一七
二一　人と生れては……一八
二二　暇ある時は……一九
二三　事を記す文は……二一
二四　多才なる人も……二三

二五　人に說くに……二三
二六　富貴の家に生れて……二四
二七　古の學を好みし人……二五
二八　今富める人の子は……二六
二九　世俗のなす所……二八
三〇　書を讀めば……二九
三一　長壽をたもたざれば……三〇
三二　人に難ぜられてこそ……三一
三三　學問の力……三二
三四　玩味すべし……三三
三五　ひろく學ばざれば……三三
三六　文武……三四

國文抄本

樂訓　目次

一　天地の惠……三五
二　人と共に樂しむ……三七
三　樂を失はざる道……三八
四　心こゝにあらざれば……三八
五　その樂極りなし……三九
六　内の樂……四〇
七　眞の樂……四二
八　世變……四二
九　樂あらずといふことなし……四四
一〇　人の命……四五
一一　世に生けらんかひ……四五

一二　從容不迫……四六
一三　清福……四七
一四　旅行……四九
一五　忍……五〇
一六　勇……五二
一七　一とせの内……五三
一八　四時のはじめ……五四
一九　花もやう〳〵さきつゞき……五八
二〇　春去りぬれば……六二
二一　夏もふかくなりぬれば……六五
二二　みな月の比……六七
二三　我は夏日の長きを愛す……六八
二四　秋きぬれば……六九

二五　秋のもなか……七〇
二六　秋の花……七三
二七　物のあはれは秋ぞまされる……七四
二八　秋は夕ぐれ……七五
二九　春秋の優劣……七六
三〇　長月の末……七七
三一　冬も來ぬれば……七八
三二　年のをはり……八〇
三三　四時の功……八一
三四　讀書の樂……八三
三五　あだにくらすべからず……八五
附錄　益軒在世時代略年表

國文抄本

文訓

一　わかき時は

わかき時は、書をよむに三つのよき事あり。氣つよくして、書を多くよんでもつかれず。是一つなり。いとま多く、妨なくて、書を多くよみやすし。是二つなり。わかく氣さかんなれば、記憶つよくして、おぼえやすし。是三つなり。此の三つの事、書をよむによし。又年たけて後、書をよむにあしき事三つあり。一つには、すでに君につかうまつりて、つかさどることあり。人のまじはりしげくなり、家の事また多くしては、書をよむにいとまなし。二つには、年やうやくたけぬれば、氣よわくなり

て、つとめて書をよむことかたし。三つには、三十より後は、としどしにおぼえよわくなりもてゆけば、少年の時、一たびよんでおぼゆるほどの事を、年たけぬれば、十たびよんでもおぼえず。こゝを以て、わかき時早く、書をよむべし。

二　智ある人は

智ある人は、一紙のふみをよみても益あり。やがて用にかなふ。愚かなれば、百千卷をよみても用なし。益にたゝずしてをはる。こゝを以て、わがごとき輩は、寶の山に入りても、手を空しくしてかへりぬ。書をみる人も崑山(一)に入らば、たからをもとめ得てかへるはかりごとをなすべし。是、書をよむ人の、必ず心得べき事なり。しかれども、近年は、又、四書(二)五經(三)をよまず

(一)崑山は支那西方の名山
(二)四書は大學・中庸・論語・孟子
(三)五經は詩經・書經・易經・春秋・禮記

して、假名がきわづかなる書をよみ、淺學なる師のわづかなる教をきゝて、道を得たりとて、人にたかぶりほこりて、數十年經傳を見たる學者をもないがしろにす。是、井蛙の、大海を知らざるにたとふべし。孔(四)孟のをしへ、皆博學を以てさきとし給ふを以て、其の非をしるべし。聖人の道は、廣大精微なり。今の人の食物の料理本、なぞ〳〵の本などのやうなることにては、其の道理知りがたかるべし。

(四)孔子名は丘孟子名は軻共に周の人なり

三　學問

詩を作り文をよむことをきらふは、人々の生れつきにより て、其のこのみきらひの各、かはれること、たとへば上戸下戸の、酒をこのみきらふ事かはれるが如くなれば、さもあらば

(一)禮記の學記篇に曰く「玉不レ琢不レ成レ器、人不レ學不レ知レ道」

(二)君臣父子夫婦長幼朋友の五つの人倫を五倫といふ

あれ。たゞ學(一)問をきらふことは、心にもいみ、口にもはゞかるべし。いかんとなれば、學問とは、なにごとぞや。おやに孝を行ひ、君に忠をなし、凡そ人(二)倫にまじはりて、義理を行はんがためなり。此の道を古の聖人のをしへおきたまへるを學ぶをいふにあらずや。されば、詩文つくる事をきらふにはかはるべし。人となりて、忠孝以下の人の道をきらはゞ、不孝の子、不忠の臣となりて、天地の間の大いなるとが人にあらずや。かかる人は、世に立ちがたし。しかれば學問をきらひて、世に立たんとするは、狼籍の人なるべし。

四　論孟

孔孟また生れ給ふとも、論孟の二書のをしへにかはることなかるべし。しかれば、今論孟を見る人は、卽ちまのあたり孔孟に教をうくると同じかるべし。此のおもひをなしてよく心を用ふべし。その上、孔門の顏子のきける所は、子路きかず、子路のきける所は、子貢きかざるを、論語の一書に皆あつめて記せり。しかれば、まのあたり教をうけたるにもまさりて、大いなる幸にあらずや。

孔門の十哲は顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓・宰我・子貢・冉有・子路・子游・子夏

五　和歌

和歌は、わが國俗の宜しきわざにて、ことばさとしやすく、心も通じやすし。此の故に、古人の歌きはめてすぐれてよき事、もろこしのすぐれたる唐詩におとらず。いにしへ、婦人といへども、歌をよくよみたるともがら多し。もろこしの才女と

*もろこしは支那をさして云ひ唐詩は唐朝の詩をいふ

いへど、及ぶべからず。これ、わが國俗によくかなへる故なり。

六　詩

詩も亦風雅の道なれども、わが國の俗にあらず。わが國の作者は、古より、さばかりの名家といへど、多くは風體正しからず。其の詞も意も、おそらくは、から人の下品なるにもくらぶべうも見えず。學者にあらずんば、つくらずともありなん。わがともがら、詩學なく、其の才器なくして、拙き詩文を作るは、良工の目より見ば、かたはらいたきことなるべし。鄙俚なる詩文をつくり、わが才のつたなきを世にあらはして、人にそしらるゝは、おろかなりといふべし。顏之推がいへる諂癡符のそしりもはづかし。わが拙き詩をつくらんよりは、古人の

（一）顏之推は北齊の人なり顏氏家訓に曰く「吾見二世人一無二才思一自謂二清華流一醜拙一亦以衆矣。江南號爲二諂癡符一」

詩の、其の興にかなひたるを誦せば、かへつて面白からん。拙き詩を一首作らんいとまには、好き書一卷をばよむべし。しからば、よからざる詩を作るは、讀書のひまつひえて、無益なるいたづらごとなるべし。たゞ天性詩才すぐれたらば、其の心にまかすべきか。それも、五箇の字を吟じ盡ぐして、一生の心を用ひやぶるは、益なし。

七　文章を學ぶ法

文章を學ぶの法、まづ六經論孟を本とし、左傳・史記・漢書・文選、韓・柳・歐・蘇等の文を學ぶべし。其の中について、心にかなへる文をえらびて、三十篇ばかりそらんじ、書きおぼえて、熟誦すべし。かくの如くすれば、おのづから文法をさとり、文字の置

（一）こゝに文章とは漢文につきて云ふ

（二）六經とは五經に樂經を加へて云ふ但し樂經は亡びたり

（三）唐の韓退之と柳宗元と宋の歐陽修と蘇東坡等

（三）五箇の字は詩をさして云ふ

きやうを知るべし。經史を見るいとまには、すこしの力を用ひて、作文を學ぶべし。淫靡柔軟の風をば見習ふべからず。麗飾を事とし奇巧をこのむは、儒者の文にそむけるのみならず、文人の文においても、貴ぶ所にあらず。

八　故*事

詩文章を作るに、故事を引き用ふること、用意あるべし。其の所に引かでかなはざる所に用ふべし。さなき所に用ふるは、是、廣才をほこりかゞやかさんためなれば、かへつて拙くして見ぐるし。和文も亦かくの如くなるべし。

*故事とは昔ありし事をいふ史記に「述二故事一」漢書に「明二習故事一」といへり

九　詩歌を作らば

其の才品ありて詩歌を作らんは、誠によし。そのうつはものにあらずば、しひて詩歌をつくりて、人にわらはるべからず。もし詩歌を作らば、詩歌をよくしれる人を師として、其の人に見せて、其のあしきを改むべし。もし明師にあはずんば、ほぼ詩歌をしれる正直なる友に見せて、其の評論をうけて改正し、其の後、人に示すべし。わが作れることは、わが心の私にひかれ、そのほどよりよく見えて、ほこる心もあれど、人はさも思はず、かへつて、あざけりわらふこと多し。

一〇　あしき詩歌を作らんよりは

なまじひのつたなき詩歌を作り出して、心をくるしめ人にわらはれんよりは、古人のつくれるよき詩歌の、其の時と其

の事にかなへるを吟ぜば、はるかにまさりて、たのしみふかかるべし。俊頼(一)も「折ふしにかなひたる歌を詠ずるは、よむにまされり」といへり。俊成(二)も「折ふし面白き所がらなどに、なまじひの歌よまんよりは、時にあひたる古歌を吟じたるは面白し」といへり。

(一)俊頼は大納言源經信の子にて歌人
(二)俊成は藤原道長より五世の孫にて歌人

一一　書狀のことば

書狀のことばこそ、殊に心を用ふべきことなれ。本邦に先代定められし書禮の法、今に至りて世にこれを用ふ。世俗の宜しきにかなひて、すでに世法となれり。書禮しらぬ人は、わが身の分をわすれ、おごりて人をいやしめ、或はうやまひすごして、へつらひとなる。二つながら無禮といふべし。書禮をしらば、おごりなく、へつらひなくして、過不及のあやまりすくなかるべし。されど、ふみには、つねのことばよりは、すこし人をうやまひすごしたるが、書禮の法なりとぞ。等輩にも、啓上*恐惶などと書くを以て知るべし。此の心得ありて書くべし。おごれる文言かくべからず。文字しれる人も、書禮をしらざれば、日用のちかきことにうとく、ひがことありて無禮なるゆゑ、人にわらはるゝことあり。すこし心を用ひて、これをしるべし。

*啓上恐惶は手紙の始め終りの詞

一二　文字知りたりとて

われ、文字しりたりとて、しらぬ人に對せるふみに、ことやう(異樣)に、むつかしく、ふるびたる、からの文字をこのんで書くは、わ

が才學あるをあらはさんとにや、其の心おしはかられて、いと見ぐるし。たゞ其の人のよく心得べき文字を、さすがに拙からず書きたらんこそ、目やすかるべけれ。

一三　人の文字を見ば

人の文字を見ば、よきことはほめ、さほどなきは、かげにてもそしるべからず、人のつとめて作れる文字を、一言にたやすくそしりおとさんも、なさけなし。作れる人そしりをきかば、ほいなく思ひ、うらみいかるべし。これをそしるは、不仁無禮にて、道理にそむくのみならず、人のうらみをうけて、あし。又、あしき詩文をほむるも、いつはりにて、ほいにあらず。たゞ其のよしあしをいはざらんにはしかじ。

(一)義理の學は經書の學
(二)文字の學は文章の學

一四　人にあはゞ

(一)義理の學、(二)文字の學ある人、また文學なくとも、一材一藝に長ずる人にあはゞ、わが才學と藝能にほこらず、みづからは、もだしていはず、たゞ其の人のしれる事を尋ねて、其の言語を、つゝしんで聞くべし。必ず益あるべし。わが智を先だてゝ、才學にほこり、わが少し知れる事をよく知りがほにかたれば、われに益なし。みづからは、才智をあらはさんと、思へど、識者のいやしむ所なり。學藝ある人のいへることを聞きてこそ、益あるべけれ。人にいはせずて、我ひとりいはゞ、益あるべからず。又、藝ある人にかぎらず、其の人の居る處の國土の名所・舊跡・土產などの事、又その人の家業の事につきても、尋ね問

ひてよくきかば、必ず益あるべし。凡そ人に問ふは、智を求むる道なり。

一五　われに學ありて

われに學ありて、われにしたがひきく人あらば、心をつくしてをしへさとすべし。しからずば說くべからず。又、わが心に自得せることありとも、其の理ふかくして、其の人きゝ得がたきことならば、人にかたるべからず。達識の人にあらざれば、さとしがたし。孔子も「共*にいふべからずして共にいふは、言を失ふ」とのたまへり。

*論語の衛靈公篇に見ゆる語

一六　一師五友

一師五友は、學者の閑居して師友なき人の、しひて名づけしなり。されど理なきにあらず。一師は書なり。聖賢の書は、師としてたふとぶべし。つぎに、筆・硯・紙・墨・案（つくゑ）の五つは、わが學をたすくるものなり。つねになれて友とすべし。其の樂きはまりなし。貧家には、一師を求め得ること、殊にかたし。其のつぎに五友のよきをえらび用ふることも、たやすからず。もし是を得ば、其の樂多かるべし。

一七　わが身をかへりみて

人は、たゞわが身をかへりみて、わが身のさかしおろかなると、さえあると拙きとのほどをしりて、つねに人にへりくだり、わが身にほこるべからず。才智ありてもなくしても、わが

身にほこりたかぶり、人をこのんで見くだし、又そしるは、つみふかし。いとおろかなりといふべし。

一八　生れつきすなほなれども

世の中に、生れつきすなほなれども、書をよまず、また、書はよめど道に志なき人あり。をしむべし。つとめて書をよみ、道に志あれども、正學のすぢをしらずして、身ををふるまて、大道にうとき人あり。是も亦をしむべし。是、みな聰明のたらざる故なり。

一九　一句を見ても

よく書を見る人は、一句を見ても、其の理を得て用ふれば、用をなして益あり。よく書をよまざる人は、千萬卷のふみをよみても、其のよきことを取り用ふることをしらず、益なし。たとへば、石をわりて玉をとる人あり。是、よく玉をしればなり。寶の山に入りても、手をむなしくして歸る人あり。是、玉をしらざればなり。書を見る人、益あると益なきとも亦、かくのごとし。

二〇　人の是非

不學なる人、或は、書をよみても粗學なる人は、人の言行の善惡を評論し、又、人の作れる詩文章のよしあしを評論すること、多くは理にあたらず。學問なく不智にして、人の是非を評することなかれ。おろかなる人は、事の善惡をしらず、只、人の

いふことを信じてまよひ、みだりにほめそしること多し。是非をしらざる人のいふ事を信じて迷ひ、みだりにほめそしるべからず。凡そ不知にして人の是非をいふことは、理にあたらず、ひがこと多し。又、少し書をよみて、みづから是として、わが才智にほこり、人のよしあしをほめそしることをこのむは、知なきが故なり。

二一　人と生れては

わが輩の作り出せる拙きふみは、漢字も國*字もあさはかなれば、人の見る目も恥かしけれど、もとより、天地の御めぐみ、殊にふかくかうぶりぬれば、其の萬一をむくい奉らんとするも、おほげなくて、そらおそろしけれど、字をしらぬ人と、小

*こゝに國字といふは假名文字なり

兒のともがらのために、かゝるよしなしごとをかきつゞけ侍り。凡そ人と生れては、官位の高下、財祿の多少によらず、諸人のために、益となることをつとめなすべし。もし、わが名をとらんとて、人に益なきことをすゝめなば、世のたからをつひやし、人の補とならじ。わが輩はづべし。もし民用の助にだにならば、鄙事小說をしるしあらはすとも、いやしみて、益なしとすべからず。道學の名を立つる君子のそしりも、はづべからず。支那の文字をよみ、義理の學のため、書を作らんこと、支那の先正の說、すでに明らかにして備はれり。わが輩愚不肖のつくれる書は、かへつて無用の贅言なるべし。

二二　暇ある時は

暇ある時は、もろこしの古き法帖にのぞみてうつすも、みな是、閑中のたのしみ、机上の清玩なり。手蹟も六藝の一つにて、日用に益あるわざなれば、古今のよきすぢを學ぶべし。いやしき俗にならふべからず。古畫を見るも亦めでたし。わが國の人のかける文字も、いにしへのは、はるかに今にまさり、もろこしの筆法にかなひていやしからず。支那の人もほめたり。凡そ古人のなせる文章・詩歌・書畫などのわざの、其の道をきはめたるを見るも、わが心を樂しましめ、理をきはめ知る助とすべし。かゝるわざにも、皆物のことわりありて、これを玩べば樂となり、又、世俗のはかなきあそびにかはりて、益を得ること多し。學者も讀書のいとまに、をり〳〵は、かゝるわざをまなぶも亦、心をなぐさむる助なるべし。是また、「藝にあそぶ」の樂ならし。

(一)禮樂射御書數を六藝といふ

(二)論語に「子曰游レ於レ藝」とあるを朱子は「游者、玩レ物適レ情之謂也。藝則禮樂之文、射御書數之法」と解せり

二三　事を記す文は

およそ事を記す文は、後世に傳はる故、おもき大事なり。わが記すこと、後代の證となる。愼みて、みだりにしるすべからず。質實にして、いつはりかざりなかるべし。もし實ならずして、詞を巧にし、飾を專にすれば、其の記す所、まことととしがたし、實錄とすべからず。益なきのみならずして、僞をつたふれば、後の害となる故に、事を記す文は、むしろ、いやしく拙くとも、すなほに實なるべし。かざりて實を失ふべからず。其の上、かざり多ければ、無用の贅言ありて、簡要ならず、人に益なし。事ながくして、見る人うめり。いにしへ文章に名ある人の作れ

るば、事を記すに、いつはりかざりなく、質實にして、無用のことばなく、言約に、事詳にして、理明らかなり。其の文のうるはしく精巧なることは、かざらずして、おのづから其の中にあり。かざり多き文は、其の作者の心に實なきこと、思ひやられ侍る。益なきことを作りて、我が心の僞り飾りをかきあらはすは、愚かなり。われ人のため、益なくして害あり。人のよきをあやまりて惡しとし、あしきことを善しとして、いつはりをしるすこと、天道のせめのがれがたし。おそるべし。およそ、かかることにつきても、天道にそむきぬれば、當時のせめ目に見えねども、後のわざはひのがれがたし。かへすゞ〳〵、天道をばおそるべし。又めづらしくあやしき文字を用ふるは、必ず淺才のわざなり。

二四　多才なる人も

すこし才ありと見えて、物かき藝ある人も、其の心平實にして、わが才をかくして、ほこらざる人は、おくゆかしくうるはしと見ゆ。多才なる人も、わが才をほかにかゞやかして、ほこる人は、多くは人をそしる。おのれにほこり人をそしるは、其の不德なるくせの程あらはれて、あさまし。「かゝらざりせばよからまし」とおもひて、あたら才學あるも、玉の盃のそこなきが如く思ひくたされて、其のきずうらめし。

二五　人に說くに

學問などの道理を、人に說くに、其の人の識見いまだ至らず、

或は、學力よわき人に對して、高く深きこと說くべからず。博學なる人も、或は聰明ならず。其の學術あしく、又頑固にして、敎にかゝはれる人に、高深なることを說けば、わが說を心得ず、信ぜずして、そしりあざける。凡そかやうのこと、其の事を歷ざれば、其の禍あることを知らず。

二六　富貴の家に生れて

富貴の家に生れて、道に志なければ、人にあはれみなく、物に情なく、萬づの理をしらず、おこたりて書をよまず、よき道を學ばずして、知惠ひらけず、人の道しるべきやうなし。財多く勢ありて、善を行ふに力あれども、善をこのまざれば行はず。是、貧賤にして道をこのむ人におとれり。もし智ありて、幸にして富貴に生れたる人は、善をこのみて、ひろく人をすくひたすけば、富貴なるかひありて、甚だ樂しむべし。

二七　古の學を好みし人

古の學を好みし人、財祿の養ひなく、貧賤にして、みづから田をつくり薪をとりて、身を養ひ、艱苦して書をよむ。或は貧しくして燈なく、雪に映じ螢をあつめて書をよみ、又かべをうがちて隣のともし火を用ひて、書をよみし人あり。或は貧家によむべき書なくして、書ある家にやとはれ、力のはたらきして、其のかはりに書をかりてよみし人あり。かゝる艱苦をなめて書をよみし人おほかりき。其の志たふとぶべく、其の艱苦あはれむべし。かくの如く、くるしみてつとめし人は、其

(一)晉の孫康
(二)晉の車胤
(三)(四)漢の匡衡

の功業を成して、道をしり世に用ひられたり。

二八　今富める人の子は

日の本も、近き世まで、都に板行の書なく、ゐなかには、書をしふる師なく、寫本だになくて、もとめかねて、他國に遠く行きて、師をたづね、書をかりもとめ、夜を日につぎてよみならひ、書を寫して歸りぬ。其の艱苦甚だし。今も、家貧しき人は、書をよむことをこのめども、書なく師なく、筆硯紙墨もともしく、書をよむべきやどもなく、明窓淨几なく、夜は燈なければ、書をよむことかなはず。田をつくり薪をとるひまにも、すこしばかり書をかりとめてよむ者あり。あはれむべし。しかるに、今富める人の子は、衣をあたゝかにき、食にあき、家居よく

して、書をよむに師あり。財多ければ、五車の書も求めやすく、明窓淨几あり、筆硯紙墨精良をきはめて、不足なることなし。又、賢父兄あれども、其のいましめをふせぎ、良師あれども、其の教をうけず。書をよむことをこのまざれば、いたづらに日をむなしくするのみならず、無賴の惡少年を友とし、非禮を行ひて學問をきらひそしり、道義をこのまず、一生おろかにして身ををはる。わが身のさいはひも富貴も、一つも用にたたず。をしむべし。むかし、もろこしの張憲武といひし人、十一の「可惜説」をつくりて、「昔、貧しき人の書をよむことをこのみしこと、今の人、家富み師あれども、書をよむことをこのまざるは、をしむべきことなり」といへり。

(一)五車の書とは五車につむほど多くの書をいふ

(二)宋代の人

二九　世俗のなす所

凡そ世俗のなす所、習つて察せず、むかしより、あやまり來りしにうちまかせて、改めざること多し。本朝の官職の名は、わが國の古制なれば、頗る正しくして鄙俚ならず。文章を作るにも、わが國古昔朝廷の法制にしたがひ、本朝の官名を用ふるも、我が國の規模なるべきに、奇異を好む書生は、わが國の古制の官名をば用ひずして、からのめづらしき官名を書きかへて用ふるこそほいなけれ。しひて異名を用ふるゆゑ、和漢合はざること多し。國の名も、陽の字をつけて河陽・丹陽・播陽・藝陽・紫陽などいひ、又、州名にかぎらず、伏見を伏陽といひ、支那人も其のあやまりにならつて、長崎を崎陽と稱す。わら

(一)孟子の盡心上篇に曰く「習而不レ察」

(二)河内丹波播磨安藝筑前の異稱

ふべし。およそ、もろこしにて陽の字を地の名とすること、山の南、水の北にある所には、某陽と稱す。いはゆる咸陽・洛陽の類、是なり。さもなき所に、おしなべて陽の字をばつけず。本邦にて、みだりに陽の字を付くること、叢林の徒よりはじまりて、其の後は老師宿儒といへども、其のとがにならつて、皆因循せり。習つて察せずといふべし。

三〇　書をよめば

書をよめば、千歳の後より千歳の前の人にあひまみゆ。わが如き愚者といへども、いにしへの聖賢に對して、まのあたり其の敎をうくるが如し。其の理、高くして大いなること天の如く、深くして廣きこと海の如し。學問の道の大いなること、

(三)咸陽はもと秦の都なり陝西省に屬す

(四)洛陽はもと周の都なり河南省に屬す

天と海との外には、たとふべき物なし。此の故に、天下の樂、是に似たるはなし。世の人、此の樂をしらず、大いなる不幸なり。たとへば、日本に居て、富士のたけ、吉野の花を見ざる人だに、みせまくほし。況や、世の人に此の書を見せまくほしく、此の道をしらまくほし。人となりて、書をよまずして、此の道をうかゞはざる人は、きはめて不幸の人にて、人となれる樂なし。あはれむべし。

三一　長壽をたもたざれば

わが輩のごとき、才なく愚かなる身は、老きはまりても、才德を成しがたし。されども、およそ人の才德を成し、學にすゝむことは長壽をたもたざれば、成し得べからず。學をつとめて長壽なる人は、其の幸甚だし。長壽をたもつ人、きはめてまれなり。長壽ならん人は、學に進みて、自得すべき計をなすべし。無益の事をなして、をしむべき月日を、むなしくすぐすべからず。わかき時よしとすること、老いて後おもへば、ひがこと多し。義理の精明なることは、年わかく氣あらき時は、なし得がたし。老いての後のことなり。わかき時は、たゞ、おほくよみて、そらんじおぼゆることをつとむべし。書をよみてそらにおぼえ、ひろく書を見ること、年老い氣おとろへては、なりがたし。

三二　人に難ぜられてこそ

學問も藝能も、人に難ぜられ、そしられてこそ、わがあしきこ

とをしりて、よき道にすゝむべけれ。みづからよしとおもひ、人にほめられては、わがあしきことをきかで、よき道にすゝむべきやうなし。わがすることはよしと思ひてほこり、人のことは、あしとおもふは、世の常の人のならひなり。かくありては、よき道にすゝむべきやうなし。

三三　學問の力

天地の道、人倫の教、萬物の理、數千年の人、數千年の事、まことに天地、古今、人物、極りなき廣大の理、廣大の事なり。しかるに書をよみ學問する力を以て、坐ながらよく知る。其の樂大いなるかな。豈つとめて書をよみ學ばざるべけんや。是を以て見れば、書をよまざる人は、富貴なりといへども不幸なり。書を多くよむ人は、貧賤なりといへども、幸大いなり。

*朱子曰く「書貴二精熟一不レ貴二貪多一」

三四　玩味すべし

書をよまば玩味すべし。たゞ一とほりよみたるのみにては、其のこゝろを自得しがたし。よく心にあぢはひて、其の理をしるべし。くはしく熟*すべし、多くむさぼり見るべからず、益なし。

三五　ひろく學ばざれば

書をよんで、つゞまやかに其の要を守るは、まことによし。廣くして守なきにまされり。されども義理は廣大なり。ひろく學ばざれば、義理詳ならず、熟せずして要約をも失ふ。たとへ

ば、あみを以て鳥をとるに、鳥のかゝる所は、たゞ一目なれど、あみ廣からざれは、鳥かゝらざるが如し。學ひろからざれば、要を知りがたし。

三六　文　武

仁義は道の體なり。文武は仁義の發なり。文武、その事は同じからずして、その道理は一つなり。文は仁の發なり。武は義の發なり。文は、人を愛し衆を和ぐるの道なり。武は、人を戒め衆を嚴かにするの道なり。

國文抄本　文訓　終

一　天地の惠

あめつちのめぐみをうけて、生きとし生けるもろ〳〵きはまりなき中に、人ばかりたふとき物なし。いかんとなれば、人は萬物の靈なればなり。されば、かく人と生れきぬること、いたりて得がたき幸なり。しかるに、我輩おろかにして、人の道を知らざれば、天地より生れ得たる人の心をうしなひ、人のゆくべき道をばゆかで、ゆくまじき道にまよひ、あさゆふ、心をくるしめ、その上、我が身に私して、人に情なく、おもんばかりなくて、人のうれひをしらず、いたりて近き父母につかへてだに、その心にかなはず、すべての人倫にまじはりて、道を

(一)書經の泰誓に曰く「惟天地萬物之父母、惟人萬物之靈」

うしなひ、人と生れたるたふとき身をいたづらになし、鳥獸と同じく生き、草木と共にくちなんこそ、ほいなけれ。顏之推が、(二)人身は得がたし、空しくすごすこと勿れ」といひけんこと、心にとゞむべし。この故に、人はいとけなきより、いにしへのひじりの道を學び、我が心にあめつちより生れ得たる仁を行ひて、みづから樂しみ、人に仁をほどこして、樂しましむべし。仁とは何ぞや。あはれみの心を本として、行ひ出せるもろもろの善をすべて仁と云ふ。仁とは善の總名なり。仁を行ふはこれ、天地の御心にしたがへるなり。是すなはち、いにしへの聖人のをしへ行ふ人の道なり。この道にしたがひて、みづから樂しみ、人を樂しましめて、人の道を行はんこそ、人と生れたるかひ有りて、之推が云ひけん、空しくすごすのうらみなかるべけれ。

(二)顏子家訓の語

二　人と共に樂しむ

人のうれひ苦しみをおもんばかりて、人の妨となる事をほどこすべからず。常に心にあはれみありて、人をすくひめぐみ、かりにも人を妨げくるしむべからず。我ひとり樂しみて、人をくるしむるは、天のにくみ給ふ所、おそるべし。人と共に樂しむは、天のよろこび給ふ理にして、まことの樂なり。この故に、天の道にしたがひ、人の道を行ひて、みづから樂しみ、人を樂しましめん事は、つねに善を行ひ惡を去るを以て、わざとすべし。かくのごとくせんには、べち(別)のつとめなし。たゞひじりの道をまなびて、その理を知るべし。

三　樂を失はざる道

みづから誇り、人をうらみ、人をそしり、人の小なる過をせめ、人のことばをとがめ、無禮をいかるは、その器小なるなり。これ皆、樂をうしなへるわざなり。忿と欲とをこらへ、心を廣くして、人をせめとがめざるは、その器大なるなり。これ、和氣をたもちて樂を失はざる道なり。

四　心こゝにあらざれば

*心こゝにあらざれば、見れども見えず、目のまへにみちみちて、樂しむべきありさまあるをもしらず、春秋にあひても感ぜず、月花を見ても情なく、聖賢の書に向ひてもこのまず。た

*大學に曰く「心不レ在レ焉、視而不レ見、聽而不レ聞、食而不レ知二其味一」

だ私慾にふけりて、身をくるしめ、不仁にして人をくるしめ、さがなくいやしきわざをのみ行ひて、わづかなるいのちの内に、はかなく月日をおくること、をしむべし。

五　その樂極りなし

心あきらかにして、世の理をよく思ひしり、物に情あらん人は、我が心にある樂を本とし、身の外、四つの時をり〳〵につきて、天地陰陽の道の行はるゝをもてあそび、天地の内なる萬づのありさまを見きくにしたがひて、耳目をよろこばしめ、心を快くし、その樂極りなくして、手のまひ足のふむことを知らざるべし。

六　内の樂

内の樂を本とし、耳目を以て、外の樂を得る媒として、其の欲になやまされず、天地萬物の景色のうるはしきを感ずれば、その樂かぎりなし。この樂、朝夕つねに目の前にみち〳〵て、あまりあり。これをたのしめる人は、すなはち山*水月花の主となりて、人に乞ひ求むるに及ばず。たからもて買ふにあらざれば、一錢をつひやさず。心にまかせて、ほしいまゝにとりて用ふれどもつきず。つねに我が物として領すれども、人いさはず。いかんとなれば、山水風月の佳景は、もとより定れる主なければなり。かく天地の内きはまりなき樂をしりて、たのしめる人は、富貴の驕樂をうらやまず。その樂富貴にまさ

*宋の蘇東坡の前赤壁賦に曰く「天地之間、物各有レ主、苟非二吾之所有一、而無レ取。惟江上之清風與二山間之明月一、耳得レ之而爲レ聲、目遇レ之而爲レ色、取レ之無禁、用レ之不レ竭。是造物者之無盡藏也」

れば、なり。この樂をしらざる人は、樂しむべきこと、目の前に、つねにみち〳〵ておほけれど、その樂をしらざれば、樂しまず。世俗の樂は、その樂いまだやまざるに、はやく我が身のくるしみとぞなれる。たとへば、味よき物をむさぼりて、ほしいまゝにのみくへば、はじめは快しといへど、やがて病おこり身のくるしみとなるが如し。凡そ世俗の樂は、心をまよはし、身をそこなひ、人をくるしましむ。君子の樂は、まよひなくして、心をやしなふ。外物を以ていはゞ、月花をめで、山水を見、風を吟じ、鳥をうらやむの類、その樂淡ければ、ひねもす樂しめども、身にわざはひなく、人のとがめ、神のいさむるわざにあらず。この樂、貧賤にしても得やすく、後のわざはひなし。富貴の人は、其のおごりおこたりにすさみて、この樂をしらず。貧

賤の人は、この二つの失すくなし。志だにあれば、この樂を得やすし。

七　眞の樂

君子小人ともに、樂をこのむは人情なり。されども、君子小人の樂とする所同じからず。禮記※に「君子は道にしたがふことを樂しみ、小人は欲にしたがふことを樂しむ。道を以て欲を制すれば、樂しんでみだれず。欲を以て道をわすれば、みだれて樂しまず」といへり。こゝを以て、小人の樂は、眞の樂にあらず、はては必ず苦となる。

※禮記の樂記篇

八　世變

人、患難ありとも、和氣を失ふべからず。もし身はしづみ位みじかくなり、時世うつろひぬとも、天命に安んじ、心を寛くすべし。土御門院の御製に

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ
　ことわり知らぬわがなみだかな

とよませたまひ、又古歌に

うきことは世をふるほどのならひぞと
　おもひもしらで何なげくらん

又

大方のならひにのみやなくさめん
　我が身ひとつのうき世ならねば

とよめるが如し。うき世にすめば、心にかなはざる事多し。是、

(一)續古今集

(二)續千載集、天台座主慈勝

(三)續拾遺集、惟宗忠景

世のならひなり。大富貴にして幸あつき人も、身に病なく、いのち長く、親戚にうれひなく、五福(四)そなはり、思ふ事心にかなへる人はまれなり。かゝる世のためしをしらで、世變のために心をくるしむるは、愚かなるかな。

(四)五福は、一日壽、二日富、三日康寧、四日攸レ好德、五日考二終命一と書經の洪範に見えたり

九　樂あらずといふことなし

もし、この理を知らば、身の上につきて樂しみ、外を願ふべからず。貧賤にしても、患難にあひても、時となく所として樂あらずといふことなかるべし。坐わるには坐わるの樂あり、立つには立つの樂あり、行くにも臥すにも、飲み食ふにも、見るにも、聽くにも、ものいふにも、樂あらずといふことなし。樂はもとより心に生れつきて、身にそへるものなればなり。されど、この樂をしりて樂しむ人すくなし。理くらければ、樂をしらず。欲ふかければ、樂をうしなふ。

一〇　人の命

人のいのちは、かぎりあり、ひいて長くしがたし。かぎりある命の内の光陰をしみ、樂しみて月日を送るべし。しばしが間も、益なき事をなし、ひが事を行ひ、樂しまずして、むなしくすごすべからず。いはんや、うれひ苦しみ、いかりかなしみて、樂を失ふは、おろかなり。なす事なく樂しまずして、月日をむなしくすごさば、千年をふともかひなかるべし。

一一　世に生けらんかひ

いとけなきより、さかんになり、老にいたり、おとろへて死にいたるまで、百とせのよはひも亦、いくほどなし。人の世にある事、かりにやどれる旅人のごとし。東坡の詩に「一年如一夢、百歲眞過客」といへるも、うべなり。かくみじかき此の世なれば、無用の事をなして、時日をうしなひ、或は、いたづらになす事なくて、この世くれなんこと、をしむべし。つねに時日ををしみ、益ある事をなし、善をする事を樂しみてすごさんこそ、世に生けらんかひあるべけれ。

一二　從*容不迫

つねの氣象は、從容不迫、この四字を守るべし。從容とは、おもむろにして、しづかなるを云ふ。すみやかにいそがはしき時も、心平かに氣和かにして、樂を失ふべからず。事多くとも、心はしづかなるべし。しづかならざれば、あやまること多し。人の我に對して、いかになさけなく無禮なりとも、いかりて言をはげしくし、目をいらゝげ、きたなきけしきを、あらはして、樂を失ふべからず。つねにその氣象、從容不迫なるべし。

*書經の君陳に「從容以和」といへるは從容不迫と同意なり

一三　清　福

清福といふ事あり。樂をこのめる人、必ず是をしるべし。是、識者の樂しむ所にして、俗人はしらず。この故に、我が身に清福を得て、大いなる幸あれども、これを知りて樂しめる人まれなり。たとへば、寶の山に入りても、寶をしらざれば、手を空しくして歸るが如し。清福は富貴の驕樂なる身にはあらず。貧

賤にして時にあはずとも、その身安く靜かにして、心にうれひなき、是なん清福と云ふめる。いとまありて、閑かに書をよみ、古の道を樂しむは、是、清福のいと大いなる樂なり。又、その心風雅にして、古書をよみ、詩歌を吟じ、月花をめで、山水をこのみ、四時のおしうつる折々の美景と、草木のかはるがはるさかえてうるはしきを見て樂しみ、貧しけれど飢寒のうれひなく、蔬食口になれぬれば、味ありて、肥濃なる美味をうらやまず。淡薄なるは、かへつて、身をやしなふに宜し。布のころも、紙のふすま、いさゝか寒を防ぐに足れり。むぐらおひて荒れたる宿におきふしても、風寒のうれひなかるべし。もし幸に書を多く貯へて架にさしはさまば、貧とすべからず。是、眞の寶なれば、滿籯の金にまされり。又、良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境にあそびて、その地の異なる形勝をもてあそぶ。是皆、清福を得たるなり。いかなるえにしありてか、かゝる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて、幸甚だし。

漢書の韋賢傳に「遺レ子黃金滿籯、不レ如レ教二子一經一」

一四　旅行

旅行して他鄕にあそび、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすゝぐ助となる。是も亦、我が德をすゝめ、知をひろむるよすがなるべし。又、いひしらぬ靈境にゆきて、見なれぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、その里人にあひて、そこの風土をとひ、あるは、おくまりたる山ふところに、いはねふみて、たづねいり、もと

より山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて、歸ることをわすれぬ。あるは、山遠く眼界廣き海べたのながめは、萬戸侯の富にもまされり。又、その里におひ出でたる名產の異なる品を見て、その味をこゝろみるも、いとめづらしく、心なぐさむわざなり。すべて勝地にあそびて見きゝせし事、たゞ一時の耳目を悅ばしむるのみならず、いく年へぬれど、その時見聞せしありさま、老の後までをり〳〵おもひ出でられて、あたかもその時見聞せし思をなして、樂しむべし。是を以て、世にめでたき事を思ひ出といふもうべなるかな。

一五　忍

忍は、しのぶとも、こらふるともよめり。俗にいはゆる堪忍する事なり。忍ぶべき事多し、大やう忿と欲との二つに出でず。我が身のこのめる酒食・聲色・財利などの私欲をこらへて、ほしいまゝにせざると、身のやつ〳〵しく、ゆたかならざるをこらへて、貧をくるしまざるは、欲をしのぶなり。人の我に情なく無禮なるをば、凡人はかくこそ有らめと思ひ、こらへて、いかりうらみざるは、忿を忍ぶなり。凡そ忿と欲とを忍べば、心平かに氣和ぎ、身やすく、人にさはりなくして、はぢなく、くるしみなく、後のうれひなく、わざはひなし。忍の一字より、萬づの善き事出づ。忍ばざれば、萬づのあしき事これより出づ。故に、古語に「忍は是衆妙の門」と云へり。忍のことわり、樂を得るにおいて、その益大いなるかな。

*呂氏曰く「忍一字是衆妙之門、當官處事、尤是先務、此處事之本也」

一六　勇

武士は、勇を專らにすべし。勇を外にあらはさずして、內にふくむべし。つねの時に和樂にして人に對するに溫厚なるべし。「勇天下をおほへども、これを守るに怯を以てす」と家語(一)にいへるごとくなるべし。怯とは、おくびやうの事なり。また「大勇は怯きが如し」といへり(二)。是、外に勇をあらはさゞるなり。和順にして禮あれば、人あなどらず。人にあなどられまじとて、言語氣象をあらゝかにすべからず。是、和樂を失へるなり。眞の勇者は、かほかたちあらゝかならず、かへつて柔和なり。張良は、その形婦人の如くにして、その氣象從容とおもむろなりしは、眞の大勇なり。欲をよくこらへ、義を見て必ず行ひ、堅く節操を守るは、これ眞の勇なり。眞の勇者は、つねには和樂なり。

(一)孔子家語
(二)老子の語

一七　一とせの內

一とせの內、あめつちの道つねにめぐり、四時に行はれて、萬古よりこのかたやまず。そのあひだ、かすみたつより雪のつもるまで、そのけしき、をり〳〵に異なり、又、あさゆふのけしき日々に異なるは、變態きはまりなきながめなり。天にありて象をなせるは、日月のかゞやき、風雨のうるほひ、霜雪のきよらかなる、雲烟のたなびけるは、天の文なり。地にありて形をなせるは、山河のそばたち流れ、江海のふかくひろき、鳥獸の鳴き動き、草木のおひしげれるは、地の文なり。かくの如く、

あめつちの内、四時の行はれ、百物のなれるありさま、目のまへにみち〳〵て、人の目をよろこばしめ、心を感ぜしむること、大いなる樂なるかな。これを樂しまん人は、眼力を以て境界とし、四時を以て良辰として、その樂、何ぞ人間三公の貴き、萬戸侯の富にくらべん。やよく心をとめて之を玩ばん人は、その樂きはまりなかるべし。いでや、天地の内にみちたる四時のけしき、きはまりなき樂をいはん。

一八　四時のはじめ

春は、まづ一夜のほどに、あらたまの年立ちかへる朝の空の光、心づからにや、ふるとしにかはりて、のどけし。睦月は、ことたつとて、貧しき家にも、春盤(一)などいふものをまうく。また、かはらけとりいで、おほみきすゝめて、先づ、父母にことぶきし、つぎに、みづから祝し、賓客にもてなすさまなど、常にかはりて、いといみじうめづらかなり。時は、今は四つのはじめなれば、そらのけしき、やう〳〵引きかへ、ごち風ゆるく吹きて、こほりとけ、遠き山邊に、かすみのうすくたなびける、さまざまに物けさやかに見えて、冬のそらに立ちかはれるよそほひ、まづ春の來れるしるしあらはなり。かきねがくれに、冬より殘れる雪の、ところ〴〵はだれに見ゆるも、こぞの名殘を惜しむべし。まちわびし梅のにほひ、百花に先だち、春の消息をつたへて、よろこぶべし。谷をいで高きにうつるうぐひすの、春をむかへて物わかき聲、はつ春の初音のけぶにあへる、耳とまりてこほしく、花ならで身にしむものなるらし。花を

(一)春盤は正月に松竹鶴亀などを作りてすゑ栗榧海藻蜜柑子橘米柿などを盛りたる盤なり

(二)袖ひちて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん（紀貫之、古今集）

めで鳥をうらやむは、これ、まづ春のたまものなり。これをはじめとして、猶ゆくさき、はるかにさかゆる春のゆたかなるめぐみ、たのもし。千年をふべきみどりの松も、今一しほの色をまして、つねに見なれしも、いやめづらしくなづさはれぬ。韓文公が「最是一年春好處」といへりしは、早春のけしき、一年の内にて、ことにめづらかにすぐれたる故なるべし。きさらぎの程より、よろづ皆、冬のこゝろ盡きて、空の色うらゝかにけしきだちて、四方山もかすみこめたるよそほひ、ことに、あけぼのゝけしき、たとふべき物なく、あはれむべし。いにしへの人、「春は曙」と云ひけんも、うべなるかな。日の光やぶしわかねば、かずならぬ垣ねの内も、冬にかはりてかゞやき出で、草木おひて、皆顔色を生じ、花まちがほに、なごやかなるけはひ、

(三)ときはなる松のみどりも眷くれば今ひとしほの色まさりけり（源宗于、古今集）

(四)韓退之は文公と謚ぜらる

(五)清少納言が枕の草紙に、「春は曙、夏は夜、秋は夕ぐれ、冬は雪のふりたる朝」といへり

(六)日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里に花もさきける（布留今道、古今集）

うれし。日かげもやうやく、のどかになりもてゆけば、人のわざも、ふるとしよりいとまあきありて、いそがはしからず。日ながくして少年のごとく、心しづかにゆたけし。海の面、日和よく、浦山も、うらゝかにかすみわたりたるけしき、いとはるけし。夕つげて、日はすでに入りぬれど、殘れる光猶久しきは、日の長きしるしなるべし。この頃は、わらはべども、紙鳶といふものに、長きいとをつけ、風にまかせてばなてば、高くあがり、雲の上まではるけくたなびくを、たはぶれとすれば、老も若きも、そらをあふぎ見るもをかし。野には、また、陽炎といふものかすみのごとく、地より立ちのぼれり。是みな、つねにはなきものにて、春めきて、いとめづらし。

一九　花もやう〳〵さきつゞき

花もやう〳〵さきつゞき、梅の花すでにうつろひて後、新なるは、我が國ならぬからもゝの花なるべし。桃紅なるは、たなびく雲のおもかげのたつ心地す。李白きは、きえがての雪の、こずゑにのこれるかと見えて、いとうるはし。櫻のほころび出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心をうごかして、えならぬながめなれ。是、我が日の本にて、四時の花のおほきなかにも、第一の見ものなれば、梅ちりて後、この比の異花は、皆けおされぬ。されど、日ごろ待たせ侍たせて、やうやうにさけるが、あくまで見るほどもなく、とく散るは、又うらめし。

よしさらば散るまでは見じ山櫻

(一)藤原爲家、續古今集

花のさかりを面かげにして

と、古の人のよみけんも、後の思ひ出にせんとにや、情ふかし。この折から、春雨のしき〳〵ふれば、わがやどの園の櫻は、いかに有るらんと、うしろめたし。柳みどりに花紅にして、春の色をゑがき出せるは、いとうるはしきながめなり。春やうやう深くなれば、風やはらかに日あたゝかに、百草芳をあらそひ、群花艶をきそふをりなれば、いづれの處か春のなからんや。かゝるけしきにふれては、人の心もうき立ちて、思ふどちうちつれて、春を尋ねてあくがれありき、ひねもす花をながめくらすこそ、目をほしいまゝにし、心を快くするわざなれ。世の中の、いみじくうれしき事の、あるがなかなる其の一つなるべし。芳草雨後に秀で、好花風裏にむなしきも、このをり

なり。杜甫(二)が詩に、「鶯歌暖正繁」と云ひ、陳希夷(三)が「野花啼鳥一般春」と詠ぜしも、皆この時なり。花と月と二つながら兼ねたる樂、「春宵一刻値千金、花有清香月有陰」(四)といふ詩を思ひ出でられぬ。この頃、夕ぐれは、遠き山邊のやけぬるも、目だつべき見ものなり。されば「春入燒痕青」と云べるも、やけ野の草を詠ぜしなり。古詩に「池塘春草生」といへりしは、この頃の眼前のけしきを、たゞ、ありのまゝにいへるなるべし。やよひも半ばなるころ、八重山吹の風にひるがへるは、井出(五)のわたりも見る心地して、にぎはしければ、めかれせず、ながめがちなり。春の花のおほかる中に、たゞ山茶のみ異花にかはり、さかり久し。ことさら、つらをなしてうゑたるつら〳〵つばき、つら〳〵に見れどもあかず。はしのもとの(階下)さうび(薔薇)も、夏をまちがほな

(二)杜甫は唐の人
(三)陳希夷は五代の人
(四)蘇東坡の詩句
(五)かはづなく井出の山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを(詞人知らず、古今集)井出は山城の綴喜郡に在り
(六)こせの山つら〳〵つばきつら〳〵に見つゝ思ふな巨勢の春野を(坂門人足、萬葉集)

り。すべて春は、草木の花、とくおそくさきつゞき、梅の花にはじまり、酴醾(七)にいたりて、花の事をはりぬるは、なごりをしと見ゆ。春の花は、いづれとなくひらけ出づる色、ことに目おどろかれぬるに、心みじかくて、はやくちりぬるは、うらめし。九十の春光はいとながけれど、何くれといそがはしく、雨風も亦しげければ、爲す事なく、はかなくすぎて、とゞめあへぬ春のかぎりの、けふの日の夕ぐれにさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春の名殘いと惜しむべし。わがともがら、うき世のちりも、わが心のきたなきも、花見るほどは忘れられしに、今より後はいかゞせんかゝる折にふれては、ことさら時のはやく過ぎて、失ひやすき事思ひしられぬ。老いぬれば、今いくとせか花もあひ見んと思へば、春のをしさはいやまさり

(七)酴醾は蔓生の灌木にて春の終に花開く

ぬ。すべて春のけしきは、一とせの内すぐれていと艶なり。そのうるはしきありさま、言ひつくすべくもあらねば、かゝるつたなき言葉には、そのかたはしだに、かたはらいたし。雨風に花はあとなくなりはてゝ、むなしき枝をのみかたみと見ぬれど、なほ春の色はそらにのこりて、おもかげさらぬも、情ふかし。藤は又春にひとり立ちおくれ、夏にさきかゝりて、かたはらにならぶ花なければにや、ひとへに興あるさまに見えて、春にわかれし物思ひも、すこしわすらるゝこゝちぞし侍る。

二〇　春去りぬれば

(一)をしめどもとまらぬ春、すでに去りぬれば、いはぬにきたる夏衣のうらめづらしく、今めかしう、あらたまれるころほひ、大かたのそらのけしき、心地よげなるに、青葉の木ずゑわかやかに、物ごとに春にたちかはりて、又、世異なるありさまなるも、いとめでたし。緑陰晝寂を生ずれども、わびしからず。閑談にふける人の爲には、繁き花にもまされりとす。をりまち得たるほとゝぎすのはつね、まづなつかしくて、鶯のなく音すでに老いたるに、かはれる心地ぞすなる。もろこし人は、ほとゝぎすの聲きくことをにくめども、わが日の本にては、昔よりこれをあはれみて、歌にも多くよめり。夜もすがら、そらもとゞろに啼きわたれども、聞く人、みな、あなかまとは思はず。おほからぬ所は、今一聲だにきかまほし。又、なきゆく方の人もまちなんと思へば、すぎゆくも、さらにうらむべからず。

(一)惜しめどもとまらぬ春もあるものかいはぬにきたる夏衣かな（業性法師、新古今集）

(二)弼王本紀に曰く「其鳴如レ日二不如歸去一」また范成大の詩句に曰く「杜鵑終勸二不如歸一」

卯の花の、かきねの雪にまがへるも、ひとり此の月の名をおひて、美を專らにすと云ふべし。およそ、卯月のけしきは、淸く和かにして、そらはれ、雨久しくふらず、日いよ〳〵永くして、いとま多ければ、出で遊ぶによし。朝まだき起きて、園をうかがふにも、風あたゝかにして、なやみなければ、日々にわたりて、見どころ多し。草も木も、皆みどりの色をあらはして、おのおのその趣をなせるは、あめつちのめぐみをうけしまにまに、生けるたぐひより、さらに私なくして、いぶかしみなく、なづさはれぬ。韓渥(三)が詩に「四時最好(モ)是(レ)三月(四)」といへる、まことにしかり。されど、年高くなりぬれば、あつさ、さむさをわびて、一とせの内いと心にかなへる時は、卯月にしくはなし。されば、にや、明の李夢陽が「四時の景、初夏にしくはなし」といへるも、

(三)韓渥は唐の人
(四)古暦の三月

いみじく、うべなるかな。卯月はかく空はれやかなれど、やがて五月(さつき)になりぬれば、おほぞらのけしき、さいつ頃に引きかへて、さみだれ久しくつゞき、をり〳〵はなるかみおどろおどろしくて、ふらぬ時だにくもらはしく、物のあやめもしらず。園をうかゞふべきひま、まれにして、つねにたれこめて、日數をふるもわびし。

二一　夏もふかくなりぬれば

夏もやう〳〵ふかくなりぬれば、木としてしげらざるはなく、草としてさかえざるはなく、日々に物を引きのぶるやうに見えて、ひたすらに綠のいろふかき夏木立こそ、花にもをさ〳〵おとるまじけれ。春の花はところ〴〵にさけるのみ

なり。夏は、山も里も、あるとしある草木ごとに、うちはへて、皆綠の色なれば、春に異なるながめなり。やちくさにうゑあつめてなづさひし前栽の草木ども、雨をおびて、各、その梢をあらはし、ところ得がほに、心にまかせておひしげれるも、うれしと見ゆ。(一)むかしおぼゆる花橘のかはれる夜は、おひかぜもいとなつかし。早苗とるころ、田家は、雨をまち得て、いそがはしくにぎはし。このころ遣水のほとりにとぶ螢の、おともせですだくを見れば、なく蟲よりいとあはれむべし。夏山のけしき、青みわたりたるたかき峯、おほぞらにつらなりて、雲の外にそびえたるをあくまで見るこそ、ことにすぐれて、心を快くするながめなれ。(二)白樂天が「放眼見青山」といへるがごとし。

(一)さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（讀人知らず、古今集）

(二)白樂天は唐の人

二二　みな月の比

水無

みな月の比になりぬれば、はし居の風したたしく、わらふだしきてをるも快し。池の心ふかく、蓮葉のにごりにしまずして、花ならで、夕かぜにほひわたるだにも、こと草にすぐれたり。ことに、花のゐみのくちびるひらけたるは、所せきまでかほりみちて、世に似たるものなく、きよらなり。涼を逐ひて木陰にやすらひ、木々の下風のなつかしきに、清き泉をむすび、夏をわするゝ心地するも、いさぎよし。光明らけき夜半の月を、清き水にやどして見るはさらなり、やり水のおとなどきくも、いみじう心ゆくばかりなり。日ごろへて、あつさたへがたきに、夕立のしぐれわたりて、なごりすゞしきも、いと快し。

清少納言は「夏は夜」といひつれど、ゆふべは蚊と云ふ蟲、人をさして、年老いては、ことさら、いみじうたへがたければ、たゞ、この朝けの風のすゞしきこそ、きよくして心にかなひ待りつれ。

二三　「我は夏日の長きを愛す」

「志士惜日短」と傅玄いへり。然れば「人皆苦炎熱、我愛夏日長」と柳公權がいへるも、うべなるかな。くれがたき夏の日は、ものまなび、わざをつとむる人のために、まことに愛すべし。されども、炎暑のさかんなる時は、すゞろに汗あゆるばかりにて、身の力よわりて、いとたへがたければ、夏のすぎゆくは、春秋のつくる日、冬のをはりなど、名ごりをしむにはかはりて、みな月ばらひする比になれば、快し。只、年の半ばすでにすぎゆくこそ、いとをしむべけれ。

(一)傅玄は晉の人
(二)此の詩句は唐の文宗皇帝の作とすべし柳公權は之に擬さて「落風自南來、殿閣生微涼」といへるなり

二四　秋きぬれば

秋きぬれば、風すゞしくうちふきて、草木のそよぎ、秋の聲の、いづくにも、うちなびきてきこゆるこそ、はつ春の風にかはり、身にしみ心をいたましむるをおぼゆれ。きり〳〵すの、きざはしのもとにすだくも、をりしりがほにきこゆ。阮籍が懷を詠ぜし詩に「開秋兆涼氣、蟋蟀鳴床惟」と云ひしも、この頃の景氣をいへるなり。大暑漸く退き、新涼すでに來りぬれば、あたかも酷吏の去りて、故人のこゝに來れる心地ぞすなる。この頃は、人の形氣、ちからを得て、燈火もしたしくなりぬれば、

阮籍は晉の代の人

古きふみども開きのぶるに時を得て、萬づの樂にまさり、こよなう面白し。をぎのうは風はぎの下つゆ、さま〳〵の蟲の音、皆、秋のあはれをもよほして、身にしむことかぎりなし。門田の稻葉、朝露にうるほひ、夕の風おとづれてそよぐけしき、ことさら、わせ、おしねの先だちおくれて、穗に出でたるありさま、皆、見るにたへたるながめなり。

（一）月ごとに見る月なれどこの月のこよひの月に似る月ぞなさ（讀人知らず、續古今集）

二五　秋のもなか

秋のもながになりぬれば、一年をへて待ち得たる月あきらけきは、凡そあめつちの間にならびなきつい時序で、一つの見もの（ここ）なれば、よろづのうるはしき景物は、皆その下なるべし。このゆふべ、此の景にあへるこそ、うき世の中の面白さもあはれさも、のこらぬ折なれ。一とせの内、月ごとに上の弓はりより居（こ）まちの頃まで、そらはれぬれば、夜ごとに心を樂しましめ目を悅ばしむること、さらに限なし。ことさら三秋の間いみじき光を心にまかせて見ること、まことにさいはひ多き此の世なり。およそ、天が下の君は、八すみをしろしめして、天地は皆その領し給へる國の内なれど、いやしきわが輩まで、あまつみそらにたゞ一つかゝれる月を、おのがものとして、ほしいまゝにあふぎ見るも、いともかしこく、身にあまりて、いみじき幸なり。やどりわかず、いやしきちまたをも同じくてらせる、いとめでたし。年々に月と花とをあくまで見るは、まことに思ひ出おほき此の世なりと云ふべし。あたら夜の月なれば、同じくは、心しれらん人と共に見んこそほい（本意）なれ

（二）居待の月は十八夜

ど、同じ心に見る人まれなれば顯昭法師が「ひとりぞ月は見るべかりける」とよめるもうべなり。もろこしの人も「秋の月は俗士と見るべからず」といへり。李白は「今人不見古時月」といへれど、むかし世々の人のながめこしも、此の月なれば、古人のかたみとなれるも、むかしおぼえてしのばし。古今の人の世をさりゆくは、流水の行きてかへらざるが如し。只、月の光のみ、いにしへ今、かはる事なきこそ、こよなうめでたく、たふとぶべけれ。月の梧桐の上にいたり、風の楊柳の邊に來るは、心を洗ひ興をもよほして、えもいはぬ快き折ふしなり。四時ともに思ひ出おほき此の世なれど、とりわき、秋の月は見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。秋も半ばすぎゆけば、おほぞらに、はつ雁がねのつらなりて鳴きわたるも亦、

(三)さびしさに哀もいとゝまさりけりひとりぞ月は見るべかりける（千載集）
(四)李白は唐の人

めづらし。

二六　秋の花

花は春とこそいへれど、秋もまた花おほかめり。ことさら野邊にたてる秋草の、名もしらぬ花ども、錦をさらすがごとく見ゆ。秋の花の、久しきにたへて散りがてなるは、春の花の見るほどもなくて、はやくちりぬるにまされり。およそ、花のいとけやけきは、春は、梅・櫻・桃・李・海棠など、木々の花多し。秋は萩をみなへし・尾花・葛花・なでしこ・ふぢばかま・あさがほ、この七くさの外、きちかう（桔梗）・りんだう（龍膽）など、くさ〳〵の花、なほも多かり。長月の比は秋の花もすぎ、もみぢも、まだしきをりなるに、菊は百花におくれて、ひとり晩節をたもち、霜にほこりて、み

さをのいろをあらはし、なべての花に時を異にするのみならず、いろ、かたち、にほひ、ともに、ことにすぐれてあでやかなれば、この時、もし花多くとも、わきてあはれむべきに、秋の末にひとりさかりなれば、をりにあひて、いとめでたし。元稹(一)が菊を詠じて「不是花中愛菊(スルニ)此花開盡更無花」といへりしは、菊をめでし心なほうすし。此の花、萬葉集(二)にのらず。古今集には詠じたれば、奈良の御時まで、いまだもろこしより來らざりしこと、いまさら古を思ひやるにも、なほ事たらず、うらみ多し。

(一)元稹は唐の人

(二)日本最初の歌集

二七　物のあはれは秋ぞまされる

秋は、そら清うすみわたり、高くほがらかにして、月日の光あきらけく、よもをかへり見るに、茫々としてひろく、風いとはだすゞしくふき、其のけしき、人の心にしみて、感ぜしむることとふかし。

春はたゞ花のひとへにさくばかり
　物のあはれは秋ぞまされる

とよみしも、時にしたがひては、ことわりにこそ聞ゆめれ。

二八　秋は夕ぐれ

秋は又、ゆふぐれのけしきこそ、たゞならず見ゆれ。うすぎりのまがきに立ちのぼるよそほひ、風のおと、むしのね、いづれとなく、人の心にしみて、春にもまさり、あはれふかし。「秋はゆふべ」と、たれかいはざるべきや。夜長ければ、曉のかね、人をお

*續人知らず、拾遺集

*清少納言も「秋は夕ぐれ」といへり

どろかしやすく、ねざめがちなり。ことさら、老のねぶりは、はやくさめて、常に夜をのこせば、いのねられぬまゝに、懷古の心殘夜に生じて、こしかたゆくすゑの事、おもひつゞけらる。老いては、つねに昔の事のみぞしのばしき。

二九　春秋の優劣

もろこしの人は、一とせの内、ことに、春をめでて、ふみにも、春を賞せし詞多し。我が國の人は、昔*より秋に心をそめける。このあらそひ、いにしへ我が國の人、ふみにも、おほくあらはせり。春秋のことわり、陰陽異なれど、そのけしきは、いづれもすぐれてめでたければ、このあらそひは、いみじき賢哲といふとも、わかちがたかるべし。いはんや、人の心同じからざるこ

*天智天皇の御宇に春山萬化の艷ゝ秋山千葉の彩との優劣を爭はしめられし時に額田王は歌を以て之を判し秋に心を寄せられし事あり其の歌萬葉集卷一に見ゆ此の外春秋の爭諸書に見ゆ

と、その面の如くなれば、その本性の好みによりて、春秋のおとりまさりありぬべきをや。わがともがらの心は、時につけつゝうつりゆけば、いづれをまされりと定めがたし。花もみぢの散れるも、いづれまさりてをしと云ひがたし。

三〇　長月の末

長月の末になりぬれば、秋の花みなおとろへ、蟲の音も鳴きかれて、もみぢやう〳〵いろづきぬれば、秋のくれゆく物思ひも亦ふかし。秋は只けふばかりぞとながむるも、名ごりいとをしむべし。春のつくるにくらぶれば、草も木も、やう〳〵かれはてゝ、行末のけしきまで、おもひやられて、さびし。

三一　冬も來ぬれば

冬も來ぬれば、けさよりなるゝうづみ火のもと、やう〳〵立ちはなれがたし。露と霜とおきかはし、もみぢいろこく、木々のこずゑ、あさぢが原も、冬がれのけしきとなり、おもかはりするも、秋にことなるながめなり。神無月の時雨もすぎて、日あたゝかなれば、すこし春ある心地す。うべ、この月を小春とぞいへる。されど一日二日やうやくかさなれば、風氣いよいよはげしく、木の葉ふりて、山もあらはに見え、殘れる松も峯にさびし。春夏秋のえん（艶）なるけしき、よそほしかりつるありさま、皆、この時にいたりてつきぬれば、ことの外にもかはれるそらかなとぞ、目おどろかれぬる。雪いみじうふりたる曉は、山も里も、ひたすら銀世界となりて、世かはり、けしき異なるありさまなり。梢のかれたるも、ふたゝび花さけるが如し。ことさら、冬の夜のすめる月に、雪のひかりあひたる空こそ、ひとり身にしみて、あはれもふかけれ。そらはれて後まで、友まつばかり所々にきえ殘りたる、はだれ雪も、いと心にくし。かゝる時、するわざなく、只、袖くゝみして、いらゝぎ居る人は、いとわびしげに見ゆ。或は、うづみ火にむかひ、文（ふみ）をまきひろぐるを以てわざとする人は、たのしみ深くぞありぬべき。すべての事、年に先立ちて早くはかるべし。わかき時つとめて文をよみならはゞ、かゝる時もわびしかるまじ。

※冬の來て山もあらはに木の葉ふりのこる松さへ峯にさびしき（祝部成茂、新古今集）

三二　年のをはり

冬の末つかたにもいたりぬれば、ことしの日かず殘りすくなく、(一)こよみのちくあらはるゝばかりにて、春すでにちかし。年の終るは惜しむべく、よはひのかさなるは、うれはしけれど、新しき年を迎ふるは、めづらかにてよろこぶべし。このころは、世の中の人、何くれといそがはしく、はしりまどふ。一とせは、はかなき夢の心地して過ぎぬれば、あとをかへりみて、せちに名殘惜しむべし。されど、人の世をふるは、思はずも變多き事なるを、一とせの内、わざわひなくてすぎぬる人は、亦樂しからずや。春秋のくれゆくだに、名殘惜しむべし。まいて、一年のをはり、けふの日の夕暮になりぬるをや。もろこしの人は、守歲といひて、今宵はよもすがら、いねずとかや。是、ふるきを送り、新しきを迎ふるこゝろなるべし。おくりむかへにつきて、うれひよろこび一かたならじ。凡そ、四つの時のおしうつる折々につきて感をおこす人は、情ふかし。愁人は、是によりて悲しみ、達士は、是によりて樂しむ。景氣は同じけれど、たゞ見る人から、えんにも、すごくも、おもほゆるなるべし。

(一)まきごよみの軸なり

(二)逸生錄曰く「除夕年俗夜蠟一春報二朝來一宜下舉二取態一燈二竹炬一闔家大小酌レ酒歡娛、拜二祝尊長一巹以待二旦一、謂二之守歲一」

三三　四時の功

一とせの内をすべて思ふに、春は陽氣はじめてのぼり、萬物生ず。そらのけしきのどかに、人の心もうらゝかにして、にぎはし。夏は、陽氣こと〴〵く上り、草木しげくして萬物長ず。秋は、陽氣はじめてくだり、陰氣のぼり、萬物をさまりて、けしきいさぎよく、人の心にしみて、感ずる事ふかし。春に對して、うらおもてとなれり。冬は、陽氣こと〴〵く下り、陰氣專らにし

て、萬物かくる。夏に對して、又うらおもてとなれり。およそ、一年のめぐりは、冬にいたりて、とぢふさがりて、品物かくれぬれば、春生じ、夏長じ、秋をさむる如きしわざはなくて、何のうるはしき景氣も見えず、四時の内にて、いたづらなる時とぞ見ゆる。されど、一とせの大いなる功をなしをはりて、そこばくの元氣をたくはへかくして、來るべき春の本となることわりをふくめるは、此の時にぞあるなる。されば、冬の氣の一かたにとぢかくれて、爲すことなきは、一とせの功成り事遂げて、をはりをなせるのみならず、又こん年の發生のめぐみをふくみたるめれば、はじめをなせりといふべし。人の、よなよなねいり、氣しづまれるは、ひねもすのいたはりをやすめ、あすの動きなすべきしわざの力の本となれり。もし、夜よくいねざれば、今日のいたはりをやすめがたく、明日のはたらき力なきが如し。冬にあたりて、人も亦天の時にしたがひて、しづかに精神を養ふべし。

三四　讀書の樂

凡そ、讀書の樂は、山林に入らずして心閑かに、富貴ならずして心ゆたけし。この故に、人間の樂、是にかふるものなし。天地陰陽を以て、道の法とし、古今天下を以て、心を遊ばしむる境界にして、其の趣、至つて大いに、廣きことときはまりなし。書をよむの樂至れるかな。聖賢のふみを見て、そのこゝろを得て樂しむは、樂しき事の至なり。そのつぎに、古の事をしるせる史には、我が國は、神武天皇よりこ(一)ことしまで二千三百七十年、

(一)中御門天皇寶永七年卽ち益軒八十一歲の時

もろこしは、黄帝より今(一)まで四千四百年の間の事をのせたり。この故に、からやまとの史を見れば、遠き古のあと明らかに見えて、我が身あたかも其の世にあへる心地して、數千年のよはひをたもてるが如し。この樂も亦大いなるかな。今、目の前なる事のみを見て、古のふみを知らざるはきはめてかたくななり。「人不レ通二古今一、馬牛而襟裾」と、韓退之もいへり。古の道をしらざる人は、萬づの理にくらく、もろ〳〵の事をしらず、夢見てさめざるが如く、まよひて一生をすごす。是、大いなる不幸なるかな。およそ、古今の書に通じて、理をきはめ事をしれらば、わが心の内にて、萬物の理、見る事、聞く事に、うたがひなくして、大いなる樂なるべし。古のふみを知らざれば、からやまと、古今天地の内にみち〳〵たる理も事も、みな通ぜ

(一)清の聖宗皇帝康熙四十九年

ずして、くらしと云ふべし。

三五　あだにくらすべからず

天長く地久しくして極りなし。人は天(一)地と參となりながら、命のみじかき事、たとへば朝露の如く、一生の過ぎやすきこと、過客の如し。歳月は行きてとゞまらず、時節は去りて流るるが如し。およそ人の命、上(二)壽は百歳、中壽は八十、下壽は六十といへり。下壽をたもつ人も亦多からず。七十なるは稀なり。かゝる短きよはひの内を、一日も善を行はず、樂しまずして、あだにくらすべからず。

國文抄本　樂訓　終

(一)易經に天地人を三才といへり

(二)莊子に、上壽百歳、中壽八十、下壽六十といへり

貝原益軒在世時代略年表

御治世	益軒年齢	事蹟
明正天皇寛永七年（皇紀二二九〇年）	一歳	林羅山江戸の忍ヶ岡に學寮を建つ
同　九年	三歳	前將軍秀忠薨ず○將軍家光諸大名の去就を試みる、皆服す
同　同十四年	八歳	島原の亂平ぐ○天主教を嚴禁す
後光明天皇慶安四年	廿二歳	將軍家光薨ず○家綱將軍宣下○由比正雪等反を謀る
後西院天皇萬治二年	三十歳	明人朱舜水歸化す
靈元天皇延寶二年	四十四歳	僧隱元寂す○翌年狩野探幽歿す
同　八年	五十一歳	將軍家綱薨ず○綱吉將軍宣下○林春齋歿す
同　貞享二年	五十六歳	山鹿素行歿す
東山　元祿五年	六十三歳	水戸光圀楠公の碑を湊川に建つ○翌々年松尾芭蕉歿す
同　同十五年	七十三歳	赤穗の遺臣大石良雄等故君の讐を復ず
同　寶永二年	七十六歳	伊藤仁齋・北村季吟歿す
中御門天皇同　六年	八十歳	將軍綱吉薨ず○家宣將軍宣下○新井白石登用せらる
同　正德二年	八十三歳	將軍家宣薨ず○翌年家繼將軍宣下
同　同　四年	八十五歳	益軒歿す

K220.8

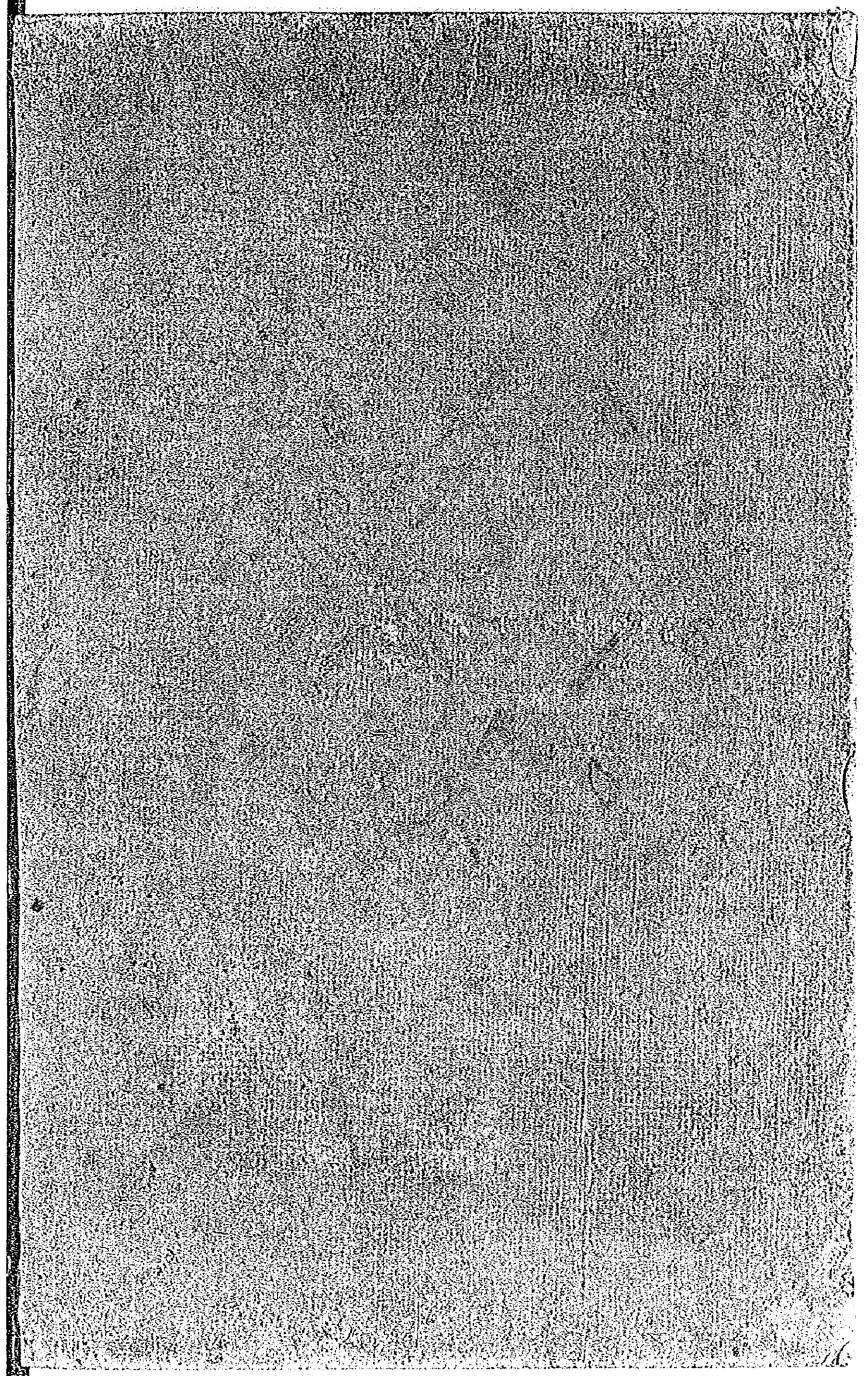
明治四十三年十一月十七日印刷
明治四十三年十一月二十日發行

國文抄本奥附
定價　金貳拾五錢

東京市下谷區谷中清水町十七番地
編纂者　上田萬年

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
發行兼印刷者　大日本圖書株式會社
右代表者
專務取締役　宮川保全

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
發行所　大日本圖書株式會社
郵便振替貯金口座　東京二一九番

各府縣下　特約販賣所

233
284